





小倉山  
青樹栄  
昔日新話  
編二

羽田富次郎著

上之卷



泉竜真足正作  
桜齋房種画

下之卷

J 69 02 309



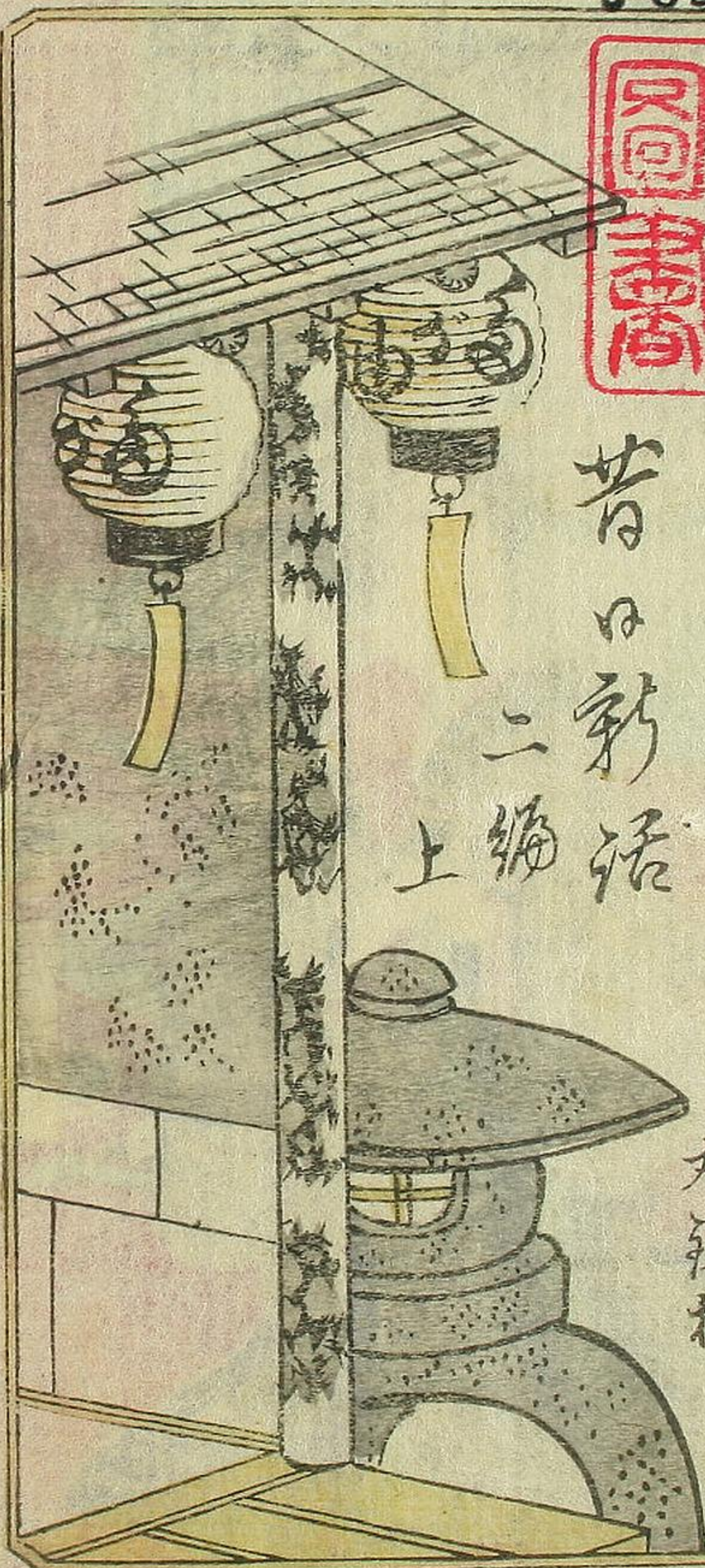
樹榮

るる龍の是心也  
櫻高府種画

昔日新話

二編  
上

丸鉄板



小倉山青樹榮 昔日新話二編之序

園み植たる青柳に餅花の蒼も咲び揚枝を削る能も彼漢土  
 の養由基が奔竹前より猶疾き移る月日と徒み來る春毎に芽へ  
 出せと三本足らぬ猿見柳の才短く趣向へ昔の柵原緑の林白波や  
 彼青木士が豪傑と拙無筆に假名書は亦も二編と續木乃  
 桜柳の巻ふ隠るる於桐屋の抱賑ひが御殿模様が多賀袖もそ  
 うい粧ひ謀りある長半興の大勢と落花微塵と追もるる  
 百々圓々自取りある兒女と知らぬ栄助が色香も迷ひ身の真愛に  
 死んと思ひ梢より身と下り隅田堤下行水は角藏が助得ある  
 筏の上の实体奇談い子も又乗りかゝる更はこれ彼墨水と筆と  
 染め秋雨一夜の長き小書一四方の見者之碗茶の友と願ふ己

明治十一菊月

泉竜亭是正記



本所南割下水の  
 居住旧幕の旗下  
 兇勇青木弥太郎

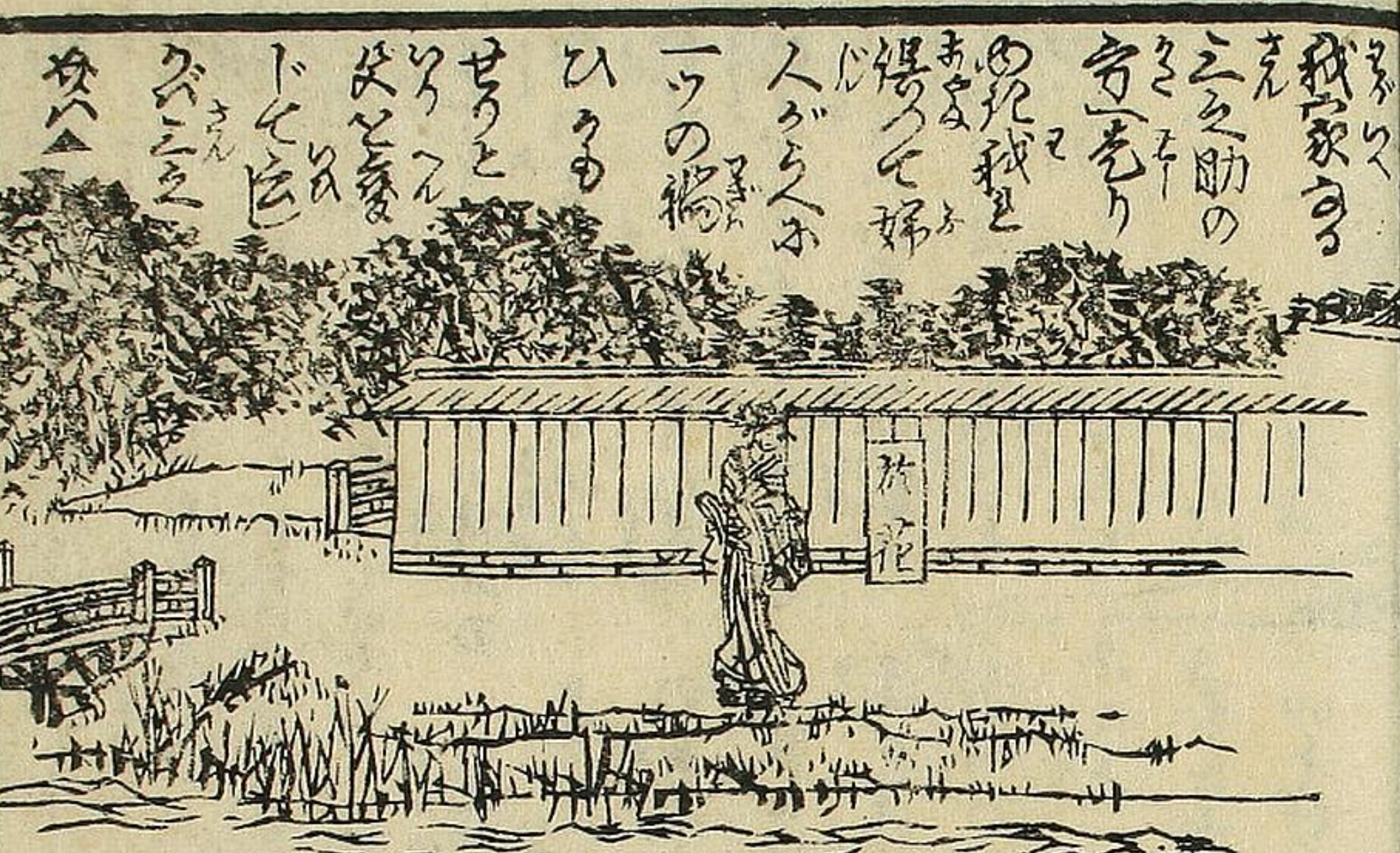


清木の妾荒地  
 雲霧の於辰

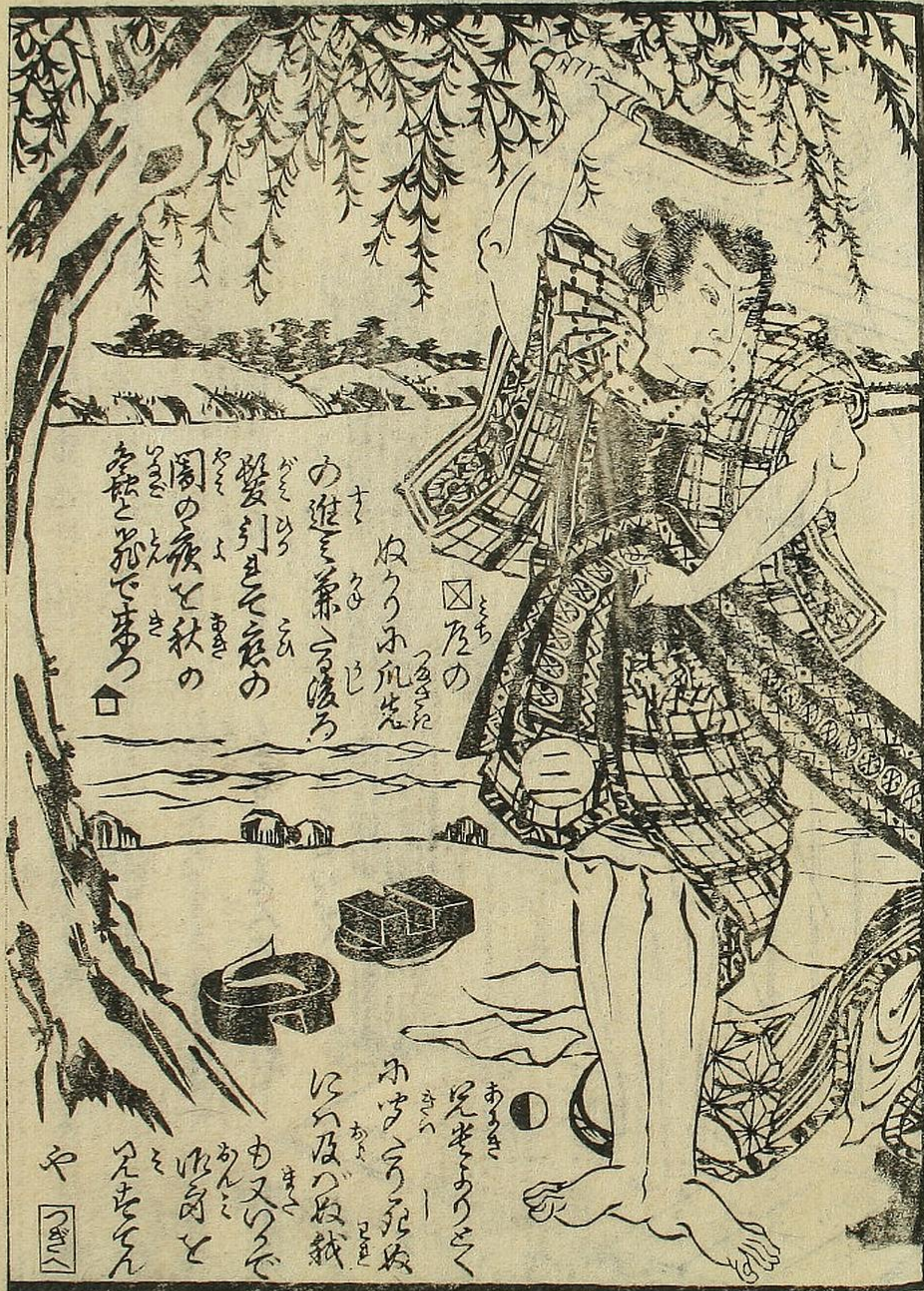
深川冬木町の  
 材木問屋  
 野口三郎  
 支配人栄三  
 取次



門の戸を叩きし童子も... 鹿丁とあそび又か何ある  
 本あるぞと問ふ小長は... とうねて...  
 大の赤い... 執事のお花うえ...  
 ありと... 小浜りて...



我が家... 之助の... 守り...  
 ひろも... せうと...  
 父と... トと...  
 六... 八...  
 歩りねと... せんと...  
 と... せんと...  
 又... せんと...  
 打... せんと...  
 家... せんと...  
 宅... せんと...  
 冬... せんと...

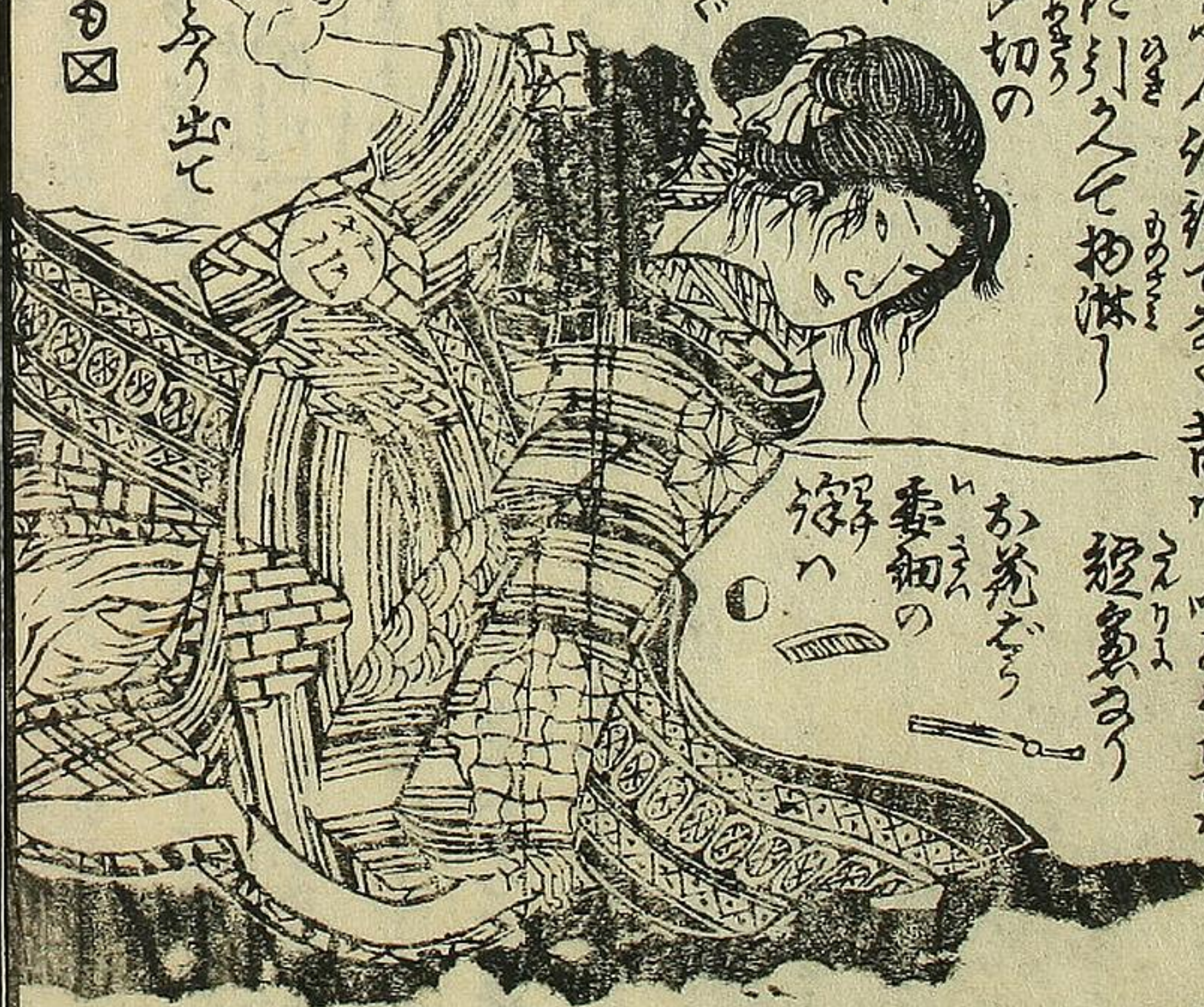


ぬりりふんせん  
 の進み兼う後ろ  
 髪引きそ糸の  
 周の夜と秋の  
 老松と花でまろ

小せうりんねぬ  
 はら及の板紙  
 わ又のそ  
 はんこ  
 はんこ  
 や

一ツにつらまをまあぐまらば  
 是より急ぐべし結ぶの  
 邪の足老履物と何ぞ  
 形ととんあさむち花が  
 後者ふたとそいそらゆ  
 ○後小お花へ我靴の  
 痛みの程もいふを  
 業のゆとろういふを  
 ども女子のたのそら

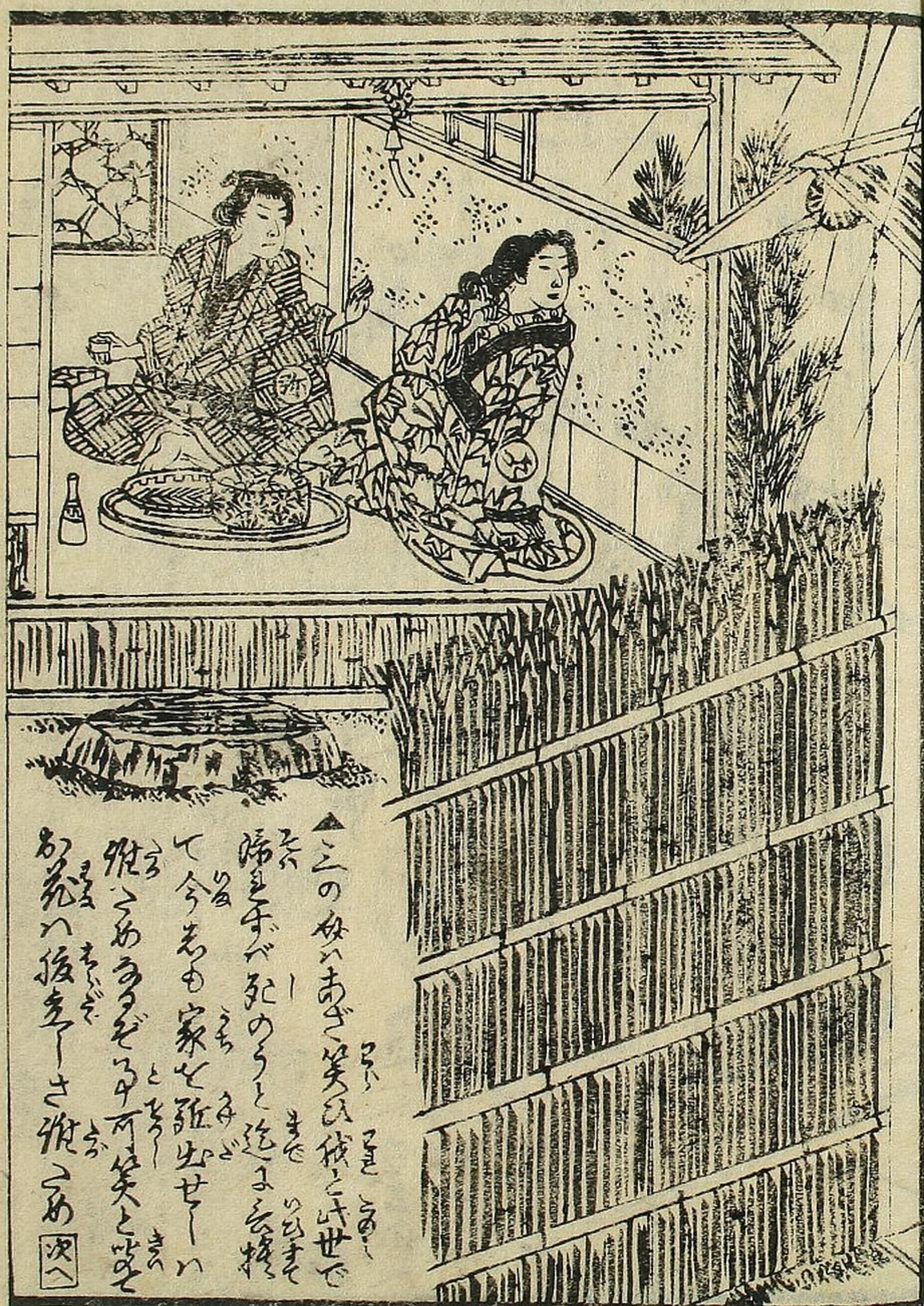
の香やいと  
 深まらる  
 周縁あや  
 しくあ  
 さもや  
 りとげども



外小人似顔てまく昔の  
 今に引之て物淋し  
 経算り  
 お花ごら  
 妻細の  
 解ハ



今宵後より徳在り欠く返して  
 身と悲び生帰中よりくさる元小サク  
 今宵の親父さんの痛いとて  
 母がうへあはれ形もあり跡さ  
 今宵の親父さんの痛いとて  
 母もせうと人の心も知ら  
 今宵の親父さんの痛いとて  
 母もせうと人の心も知ら



この女はあき笑ひ候とけ世で  
 帰るや死のうと迄まを替  
 て今も家を出せし  
 唯とあまをさる可笑と世  
 お花の後ささけのあ次へ





あんなに  
まよひま  
まよひま  
まよひま

○ ちうぶむつひの曲じり人の舞  
りんやと飽まを能舞とよめられた  
大権不  
歌の三  
の女和  
とまわら  
あつち  
色け文の  
まがへあつじ

○ ぬい  
まわらけ  
のは



○ ちうぶむつひの曲じり人の舞  
りんやと飽まを能舞とよめられた  
大権不  
歌の三  
の女和  
とまわら  
あつち  
色け文の  
まがへあつじ

○ ぬい  
まわらけ  
のは

○ ぬい  
まわらけ  
のは



二ツ葉て我々の  
 瓦町と云ふは  
 右馬場の標の  
 石のふとぬらび  
 ききと海と橋の  
 ちよと浦をさ  
 流すこれらとあつた

つぎ  
 まいふ  
 ちよと浦をさ  
 流すこれらとあつた

船のついでに  
 船をまわす  
 船のついでに  
 船をまわす  
 船のついでに  
 船をまわす

橋のついでに  
 船をまわす  
 船のついでに  
 船をまわす  
 船のついでに  
 船をまわす



船のついでに  
 船をまわす  
 船のついでに  
 船をまわす  
 船のついでに  
 船をまわす



物束とつづき小法師と云ふ木ハ  
 皮が肥後おまうとらけけねふ掛  
 長流うらねらん今より被取

そと除ん  
 とする内ハ  
 五才小 道



小倉がやめて密をさるすとりは  
 られ妨げうとあひしおろくも長流かこそ助と  
 けりてはは殺さ世に後の縁いと除きり  
 密におおむらそあはるのこ助お向ひ  
 お花にお花とまふりて死骸とまはれ  
 まいしうとつづき小法師と云ふ木ハ  
 皮が肥後おまうとらけけねふ掛  
 長流うらねらん今より被取



不仕合せの打候もたて  
 心も空しくお花が夜るの  
 髪のはり手を剥取つて美時  
 い世の代めの候ぬべし毒小  
 足色をぬぐへんと  
 こゝぬが持  
 うる世と  
 お花の  
 折の腰より  
 髪に緑の黒髪  
 振れし小  
 袂たもとから  
 けしきり

包む手  
 毒婦が足が  
 足もつを  
 危あやし  
 の支死人栄助  
 まいぬと  
 と退ては  
 か殿が  
 推おしす  
 と云



やく姿とて  
 うるはし女  
 あゝ木も大い  
 殺すに候  
 善く暴君  
 と名  
 是も  
 彼が候  
 うるはし女  
 婿不意の若とらん少雨  
 あゆる女放れ何ある過ちあらん  
 小むし秋のつらに木放ちよ  
 彼を先取てお辰が換子見届ん汝の想河

懐中ののを  
 取とり  
 衣うき  
 衣うき  
 本集の目  
 今も借りか  
 これと我身は  
 大切  
 出抱を先  
 今更との次へ

〇家へは戻らざるべしとせんと願ふ  
 〇死にむらひなきふ病の瘳りあらんといふ人  
 〇一日二日ハ秋を待つてきて不在  
 〇生かすは死にむらひなきふ病の瘳りあらんといふ人  
 〇達不孝の歳をともむか邊にまはれて下  
 〇されと怪や交り暗めを替りて  
 〇若狭の物淋しくも秋を待つて水府  
 〇の板垣と古き小舟りつる花時を  
 〇花の穴は似も中らびよあるは  
 〇夜風を犯し出舟店丁と迷ひに取  
 〇女の死骸小舟に付て夜渡り別る  
 〇有橋の安達が糸の老女より終  
 〇思ふに死と生を待つては  
 〇さしてあひびよる下巻つ

小倉山 青樹榮

昔日新話

泉竜亭是正作 初編ヨリ追々出版

這ハ徳川家の旗下小青木弥太郎小倉菴長吉唱妓  
 賦ハ小春情小事寄暴借強護ハ悪事青木の細君難  
 辛苦ホと記一繪ハ草及紙綴りされハ近世の珍書あり

白縫物譚

初編ヨリ六二編ニ刻成  
 故人種員稿種彦作  
 二波菊寿堂主人當今  
 日ハ新雪社主七後編と  
 出板するハ暇に  
 月氏ふとハ板店より一層  
 念入りつてハ板を看考方  
 陸續に來ると伏て希ふ  
 明治十年 板元致白

假名手本忠臣藏

露光作 芳虎画

延壽百人一首

中本一冊 玉蘭齋画

地本錦繪問屋

日本橋通三丁目四番地  
 延壽堂 林小 九屋鉄次郎板元



上の巻より  
この時代の栄助の女編局と

勅の世と帯際多々  
と振解ると仕  
折傷の歳の花  
より一人の武士形  
出二人等しく掛  
の挑を合ふ松  
る小二人の曲若  
○着小又料人  
とんとして胸の  
と人松を纏つ  
格やうに  
一夜の  
松を  
格やうに  
一夜の

何れも  
よりの  
小は  
妻の  
何者の  
業も

知世之泉  
 上世之林  
 代皮之控  
 生空之空  
 聖心之聖  
 抱而之藥

知世之泉  
 上世之林  
 代皮之控  
 生空之空  
 聖心之聖  
 抱而之藥

玉皇之玉  
 交本之玉  
 榮助之玉  
 暗夜之玉

玉皇之玉  
 交本之玉  
 榮助之玉  
 暗夜之玉



抱水之抱  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代

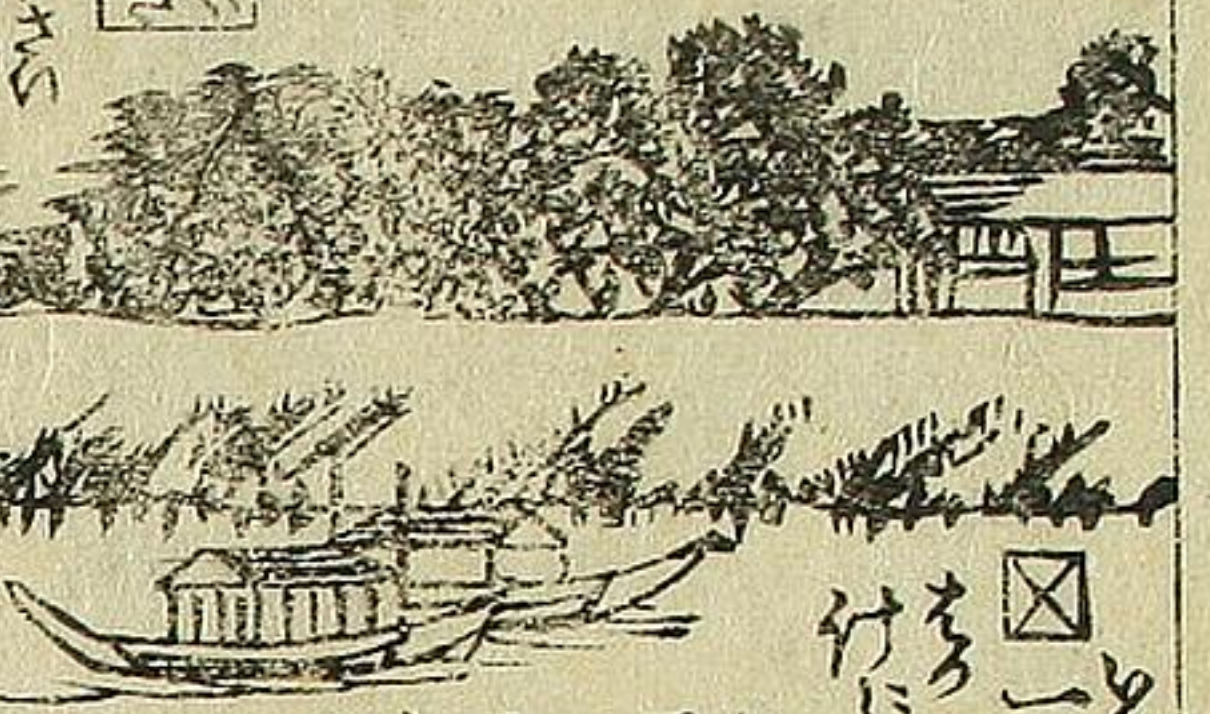
抱水之抱  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代



代皮之代  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代

代皮之代  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代  
 生空之生  
 聖心之聖  
 代皮之代

一云小栗助助に取と上げ船船の隙小  
 けい原由血筋が重なる故抱の血はどよよ云持子



子細  
 色なき  
 滑り  
 あん  
 及ん  
 あり  
 孫も

○ 身  
 え  
 さね  
 けつ  
 どうぞ  
 ○  
 身  
 の  
 う  
 ち  
 の  
 血  
 筋  
 が  
 重  
 なる  
 故  
 抱  
 の  
 血  
 は  
 ど  
 よ  
 よ  
 云  
 持  
 子  
 ○  
 どのせで張るは

後合  
 血筋の  
 血身  
 けつ  
 報ずる  
 くる  
 もあ  
 とあひ  
 且ん  
 中  
 角  
 せん  
 一

名  
 の  
 け  
 と  
 つ  
 あり  
 さ  
 小  
 角  
 筋  
 推  
 と  
 角



とあ  
 小  
 角  
 筋  
 推  
 と  
 角



ついでに  
 通りかると  
 芝居場  
 しんぶん  
 狭きル  
 ありう  
 中まの  
 うへ  
 あらう  
 ねむ  
 の  
 山



及以諸俱小  
 中の  
 肉の  
 福以  
 かな  
 死に極め  
 一とま  
 物  
 一六店  
 且警  
 身  
 尾  
 花

の  
 あく  
 朝日  
 なる  
 へ  
 の  
 推  
 出  
 失  
 名



幸が  
 と  
 放  
 け  
 再  
 跡  
 の  
 支  
 死  
 ありぬ

南  
 招  
 榮

の  
 助  
 助  
 助



かども業助が坊什とあり  
 そのおとこは比枝家重なり  
 お花が死がのとあのみ  
 あるとまの宿れと  
 助先を助  
 小形く  
 備われと云  
 あらめ小倉房へ  
 戻世がうら  
 えんがせ  
 彼て便直しぬ  
 比が何成るるに候  
 一と素車長よりおろ  
 小長及所ハ様平と修二坊ハ東つ

坊何と云の備きと強りあけ候と  
 返せよも才継くしてまほは高様  
 坊付あられ候と  
 助けて△ぬゆり  
 長  
 鉄  
 此をさう先のおまの何君  
 きと高様未と知りぬすや



流めらんとせ  
 夢りて付て  
 一人知るまのし流りぬ  
 浴もぬれ候身の上出るま毎ふ

お花がとこへ  
 下京  
 素車ハ  
 歩笑ハ揚真ハ  
 肘の運りて夏れ  
 比再び揚とあせ  
 歩候まの故亡ハ



〓 柳の腰まきまき格好の上帯と袴に結んで尻生しの格好の  
 〓 宣紙買教書の  
 〓 怒り  
 人の膝  
 扶を  
 坊に  
 あは  
 柳の  
 奴ホと  
 教書の  
 志をせ  
 つつと  
 てる  
 お

〓 柳  
 〓 梅  
 〓 宣紙買  
 〓 怒り

〓 宣紙買教書の  
 〓 怒り  
 人の膝  
 扶を  
 坊に  
 あは  
 柳の  
 奴ホと  
 教書の  
 志をせ  
 つつと  
 てる  
 お

〓 柳の腰まきまき格好の上帯と袴に結んで尻生しの格好の  
 〓 宣紙買教書の  
 〓 怒り  
 人の膝  
 扶を  
 坊に  
 あは  
 柳の  
 奴ホと  
 教書の  
 志をせ  
 つつと  
 てる  
 お



〓 柳の腰まきまき格好の上帯と袴に結んで尻生しの格好の  
 〓 宣紙買教書の  
 〓 怒り  
 人の膝  
 扶を  
 坊に  
 あは  
 柳の  
 奴ホと  
 教書の  
 志をせ  
 つつと  
 てる  
 お

〓 柳  
 〓 梅  
 〓 宣紙買  
 〓 怒り

〓 宣紙買教書の  
 〓 怒り  
 人の膝  
 扶を  
 坊に  
 あは  
 柳の  
 奴ホと  
 教書の  
 志をせ  
 つつと  
 てる  
 お

〓 柳の腰まきまき格好の上帯と袴に結んで尻生しの格好の  
 〓 宣紙買教書の  
 〓 怒り  
 人の膝  
 扶を  
 坊に  
 あは  
 柳の  
 奴ホと  
 教書の  
 志をせ  
 つつと  
 てる  
 お

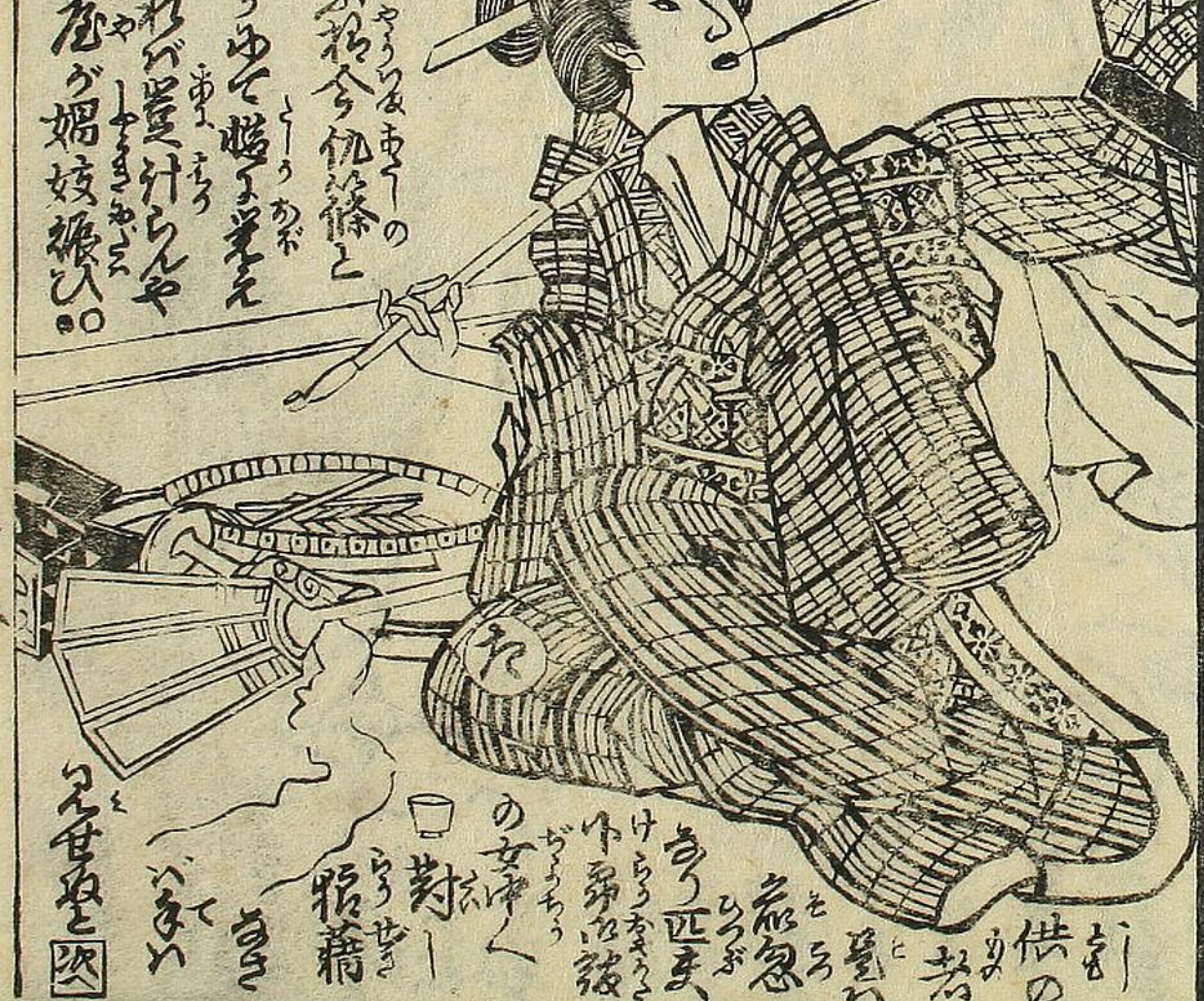


一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、



一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

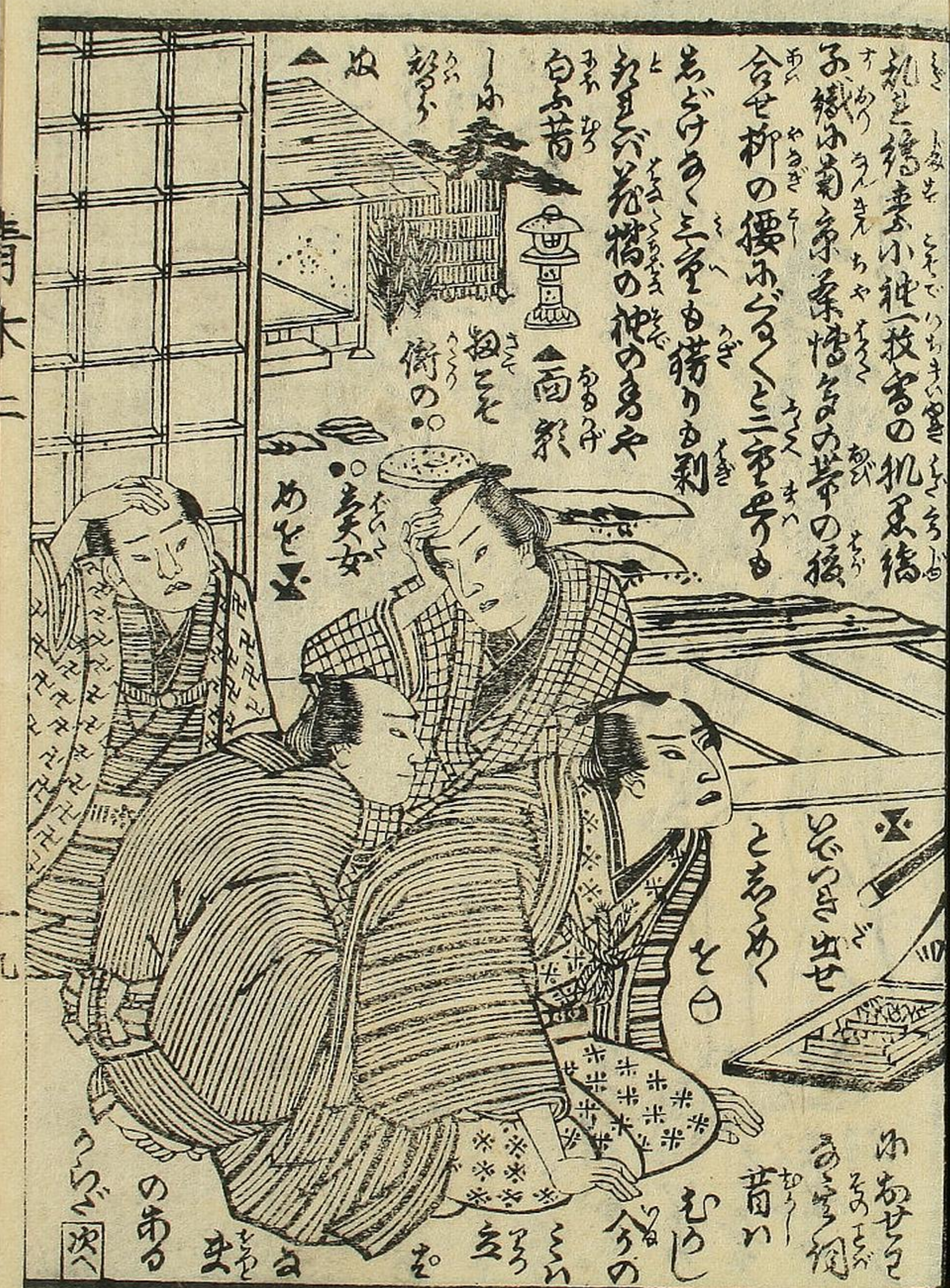


一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、



つぎ 坐栗腹  
とせ 櫻の枝乃  
とせ 物男 仇係 捕  
掛り 上 糸 糸 様  
引 志 志 志 志 志  
字 志 志 志 志 志

○志 志 志  
志 志 志  
志 志 志



とせ 志 志 志 志 志  
とせ 志 志 志 志 志  
とせ 志 志 志 志 志  
とせ 志 志 志 志 志  
とせ 志 志 志 志 志

志 志 志  
志 志 志  
志 志 志







